デイジー教室設立の経緯と現在の活動状況のまとめ

2026 年 1 月 31 日

1. デイジー教室開設の経緯

(1)「不器用な子どものためのスポーツ・遊びの教室」から「はぐくみ療育教室」へ

デイジー教室の原点は、現理事長が福井県小児療育センターに勤務していた 1990 年代初頭に設立したボランティア活動「不器用な子どものためのスポーツ・遊びの教室」にある。

当時、療育センターでは就学後の支援に制限があり、継続的な支援を行うことが困難であった。そのため、運動が苦手な子ども、集団活動に入りにくい子ども、失敗体験を重ねやすい子どもたちに対し、勝敗や技能を競わず、安心して体を動かし、人と関われる場を提供することを目的として発足した。

療育センター職員、保育士、元教員、学生らが協力し、学校や医療の枠を越えた実践として継続された。この活動はやがて「はぐくみ療育教室」へと発展し、スポーツ・遊びを中心とした支援に加え、学習面や対人関係への支援も行うようになった。

ピーク時には約 100 名の児童が参加し、常勤職員を置かない体制で運営されながらも、多数の不登校児が学校復帰を果たすなど、大きな成果をあげた。(参考:『はぐくみ療育教室 LD 研究と実践』2001.7)

(2)クリニック開設に伴う医療法人運営への移行

その後、理事長のクリニック開設により、ボランティア活動としての継続が困難となり、教室をクリニックの医療・療育の枠組みの中に位置づける必要が生じた。

運動面の支援は、PT・OT による感覚統合訓練や、円山事業所でのフットサルクラブへと発展し、いずれも放課後等デイサービスを活用した活動として展開されてきた。

一方、クリニックで Dyslexia(発達性読み書き障害)診断例が増加する中で、読み・書き・計算につまずく学習障害児を対象とした作文教室や学習塾形式の支援、学研との連携などさまざまな試みを行ってきた。しかし、担当者数の制約もあり、常時 10 名前後への対応が限界であった。

(3)ICT 支援室の立ち上げと限界

Dyslexia 児への支援として、ICT を活用したタイピング指導を目的に「ICT 支援室」を立ち上げた。多くの児童がタイピングを習得し、書字負担の軽減という点では大きな成果をあげた。

しかし、ICT 支援室では Dyslexia 指導において最も重要である「読みの力(読解力)」を育成することが困難であったこと、また放課後等デイサービス制度の枠組みによる時間的・制度的制約があったことから、制度外の完全な学習塾形式として「デイジー読解教室」を開設するに至った。

2. 現在のデイジー教室の構成

設立順に以下の 3 教室で構成されている。

・デイジー読解教室
・デイジー英語教室
・デイジー作文教室(2026 年 4 月開講予定)

そのほか、「デイジープラス」として、学校での学習方法の指導、入試における合理的配慮取得のための ICT 活用支援、夏休みを利用した短期集中支援なども実施している。

3. デイジー読解教室(読解とタイピング)

デイジー教室の中心となる読解教室は、小学生から中学生の Dyslexia 児を主な対象としている。

子どもたちが苦手とする読み・書き双方の負担を軽減しながら、内容理解力および表現力を育てることを重視している。「学べる」「分かる」という成功体験を通して、自身の特性に合った学習方法を身につけることを目標としている。

月 2 回・1 回 60 分を基本とし、集団形式を基盤としながら、個々の特性に応じて個別対応を柔軟に取り入れている。保護者同席を原則とし、家庭と学習状況を共有しながら無理なく継続できる形を重視している。

4. デイジー英語教室

(1)日本語母語話者の英語学習の課題と指導理念

中学 1 年から 3 年までの連続データにおいて、ディスレクシアなど神経発達症のある日本語母語話者では、英語のみが極端に低成績となる傾向が明瞭に確認された。この落ち込みは国語や社会よりも大きい。

その背景には、英語が「音素レベルの音韻処理」「ワーキングメモリ」「迅速な文字―音対応」といった、日本語では強く要求されない能力を必要とする“深い正書法”言語であるという特性がある。

しかし日本の中学校英語では、まさにその最も困難な領域(音―綴りの即時再生)を評価の中心に据えており、ディスレクシア児にとって制度的に不利な構造となっている。

一方で、日本語話者向けに最適化したフォニックス指導、カタカナ補助、ローマ字知識の再利用などの明示的支援を導入すると、読み・綴りの正確さやスピードが向上する所見が得られている。これは国際的な「ディスレクシア児への明示的音韻指導は有効」という研究知見とも整合する。

(2)杉江式「日本語母語話者向けフォニックス＋カタカナ表記指導」

当クリニック言語聴覚士による杉江式指導法は、日本語母語話者の特性に合わせて再設計された画期的な方法である。

主な要点は以下のとおりである。

・日本語話者向けに最適化したフォニックス指導
・ローマ字知識やカタカナ表記を活用し、音と綴りの対応を整理する
・音素レベルでの明示的音韻トレーニングを重視する
・日本の通常授業で曖昧になりがちな音素意識を明確化する
・「書け」「覚えろ」型指導で取り残される児童を支援する

日本語話者向けに再設計されたフォニックス、指文字化、カタカナ転写は、英語の音形を「見える化」し、ワーキングメモリ負荷を軽減しながら音韻対応ルールを安定させる補助となる。

5. デイジー作文教室

2026 年 4 月開講予定。

読解・英語で培った基礎力を土台に、文章構成力、論理的思考力、自己表現力を育成することを目的とする。